

平成 28 年度 「関東地区会」研修会報告

関東地区会会長 杉本 太平

平成 28 年度の関東地区会研修会は年間テーマを「家族を支える人間関係の構築ー地域・教育・保育・福祉・医療などの諸領域からー」として研修実践を展開した。本報告では、各研修会の内容を(1)テーマ (2)展開技法(研修方法) (3)研修内容(要約) (4)キーワードに整理して、全体の学びの分析・考察をする。

1. 第 24 回研修会概要 (5 月 14 日/越谷市サンシティホール小会議室/佐藤啓子:資格講座 B-2/話題提供:小林幾子)

(1)テーマ「認知症の高齢者を抱える家族の責任と人間関係」

(2)展開技法 講義・行為法(心理劇)「認知症の高齢者と家族」・シェアリング

(3)研修内容

①テーマに基づく話題提供 (話題提供者:小林幾子)

話題「高齢者介護の現状と課題」

○特別養護老人ホーム、居宅介護、これからの老人問題についての現状と課題

施設数や介護スキルに地域差がある。また高齢者間においても身体的、経済的に格差があり、少数の若い世代のみが多数の高齢者を支えるのではなく、同世代間にある格差を同世代で埋める必要があるだろう。高齢者の自助と互助の両方を進めていく必要性がある。

②話題提供に基づく心理劇的場面の構成 (監督:佐藤啓子)

○ 2 人 1 組で、認知症の高齢者と家族になる

●役割と場面のみを決めて高齢者と家族の特色がわかるところまで劇化

・80 代の認知症の女性とその夫。女性は他の人が持っているものを自分のだという。

夫はそんなはずはないといってその場から連れ去る。

・曾おばあちゃんとお嫁さん。お金が置いてあったのになくなったというおばあちゃん。途方にくれるお嫁さん。

・85 歳ぐらいの認知症の母親とその娘。母親は自分が認知症だということには気が付いていない。娘が訪ねてくると台所で煮物の火がつけっぱなしで焦げている。

・70 歳後半の父親と 40 歳代の娘。娘は介護のため仕事の量を増やさずに生きてきた。父親は娘の料理がおいしくないと言う。

●役割を交替して自分がやってほしかったように演じてみる。

・一緒になって探すなど、一緒になって何かやるということはひとつのやり方だろう。

・やっていることを認めるという行為があるといいのでは。

・軽度の時からのかわりに気をつけると、重くなった時の思いのずれが少なくなるということがある。

●ある一つの場面を取り上げて、監督チームが演じる。

母親が、ポシェットがなくなったと騒いでいる。嫁に向かって、あなたが取ったに違いないと責める。嫁は、私は取っていないと言い張る。その場面に夫としてかわる。

・一緒に探してみようと促す。

・母親の気持ちを切り替えようと試みる。

・母親を諭そうとする。

・妻にもねぎらいながら、絶対あるよ、といいながら一緒に探す。

- ある会合で、アドバイザーの人を囲んで話し合う。
 - ・それぞれが夫としての自分なりの思いを打ち明けあう。
 - ・アドバイザーから、母親は息子を溺愛しているので、その場では母親の思いを汲み取る態度をすとうまくいくことがある。妻とは母親がいないところで分かり合っていけばよい。

③シェアリング・まとめ

- ・今後、個人的な次元・集团的次元(家族、地域など)・社会的次元(組織、制度など)のそれぞれが充実していくことが望まれ、それらの効果的な組み合わせを取り込んでいくことが重要となろう。
- ・今後、ほとんどの人がこのような事態に遭遇することを考えると、日ごろから家族や友人間で話し合い準備しておくことの重要性が今回確認された。

(4)キーワード

- ・特別養護老人ホーム、居宅介護、これからの老人問題
 - 制度と地域格差、支援者スキル
- ・貧富の格差や様々なニーズに対応する政策
- ・高齢者の生きがいややる気を尊重するための方法
- ・介護する家族の生活を支える体制
- ・高齢者と介護者の相互理解と関わり方の工夫。「認めて支える」関係の構築
- ・組織的な連携と役割分担
- ・家族を支える専門的な支援
- ・個人的な次元・集团的次元(家族、地域など)・社会的次元(組織、制度など)

2. 第25回研修会概要 (7月9日/越谷市中央市民会館/矢吹知永・杉本太平/資格講座B-2)

(1)テーマ「児童期・教育問題 学校教育現場における人間関係」

(2)展開技法 講義・事例検討・行為法(心理劇)「当事者間の認識のズレと関係支援」 ・シェアリング

(3)研修内容

教育現場では、教師は多くの児童・生徒とかがかわる。また、児童・生徒同士も毎日様々なかかわりをもちながら生活している。子どもの教育には、学校と家庭の連携が必要不可欠であるが、子どもの数だけ家庭があり、その家庭はそれぞれの事情をかかえている。学校がそれらの家庭とうまく連携しながら子ども達を育てていくためのヒントを、ロールプレイ・心理劇を通して考察する。

①テーマに基づく話題提供 (話題提供者:矢吹知永)

○前提として最近の義務教育現場・公立学校の状況を報告

- ア. 教師の質の低下
- イ. 客中心主義
- ウ. 家庭の育児機能の低下
- エ. 生活スタイルの多様化

【事例検討】

※話題提供された3事例 個人情報・守秘義務の関係上事例の内容は掲載を省略する。

事例1: 子どもの言うことを絶対的に信じる保護者と学校でつかんだ事実とのズレ

事例2: 子どもの養育に対する認識のずれ

事例3: 様々な家庭の考え方

※それぞれの事例に対して、検討課題に即して参加者の意見を出してもらい、課題解決の可能性を見出していく(これも詳細は割愛する)。

②話題提供に基づく心理劇的場面の構成 (監督:杉本太平・矢吹知永)

- (1) D子の事例を中心に教員と児童と家族の課題を検討する。

- ・役割と場面を決めて監督の指示に基づいて特色がわかるところまで劇化
- ・順に演じる。事例①②は監督の指示により演じる。

展開① 授業でD子に注意をした時に、表情が変わったD子の様子を見た教師がD子に教室に残るよう指示してかかわる。

展開② 他の参加者が教師役として様々なかかわり方を演じて、どのようなかかわり方がD子のところを開くことに繋がるか検討する。

③シェアリング・まとめ

- ・学校側の危機管理ができていないため悪化している。さまざまな親、その親の状況、家族病理に対処できていない。そのため不満や怒りが解決できない。
- ・若い教員もいろいろな対応をするためには勉強しなければいけない。
- ・事例の児童の傷口を焦点化して対応すればこころの傷が大きくなる。
- ・子どものよき理解者でいたい。それが最初かと思った。
- ・教育現場は要求されることが多くオーバーワーク。本日の話題提供内容から大変な事例が多いことがわかった。
- ・家庭、家族を支援するためには何が出来るのか、糸口がみつけれられるか、子どもたちを支えるために自分たちになにができるのか研鑽していきたい。
- ・現場の教師は社会的な状況の変化に対応して、日々様々な困難な問題に必死に取り組んでいるということが今回の研修で理解できた。事例研究は後付けの検討ではあるが、子どもや家族をきちんとアセスメントして個々の問題を整理する方法を学びあうことができた。複雑で多様化している家族への対応をしていかなければならない現代の教師にとって、子どもや家族を深く理解し、何が問題・課題となるのかをアセスメントして支援の方法を検討する力の養成が求められてくるものと思われる。

(4) キーワード

- ・子ども達の「心を支える」ための教育の在り方
- ・教師理解・教師を支えるための支援
- ・組織的な支援体制の構築
- ・多面的・多層的な理解のためのアセスメントと個別的な教育・指導計画
- ・家庭状況・家族関係への情報収集
- ・事後対応(家庭や専門機関との連携)
- ・キーマンの見極めと協働関係

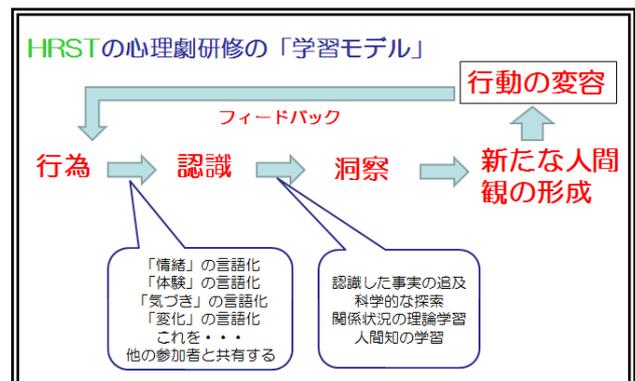
3. 第26回研修会 (9月24日/越谷市中央市民会館/杉本太平:資格講座C-1)

(1) テーマ「保育・教育現場における人間関係」

(2) 展開技法 講義・ウォーミングアップ・セッション・行為法(心理劇)「課題解決の心理劇」・理論・原理からの整理(関係学理論)・シェアリング

(3) 研修内容

関東地区会独自の人間関係力を高めるためのスキルトレーニング(HRST)の研修。「家族を支える人間関係の構築—保育・教育現場における人間関係—」をテーマに、特に子育て中の家庭や保育現場での子どもを中心とした人間関係の問題について心理劇(関係心理劇)を通して、課題解決を図る。



① テーマに基づく話題提供 (話題提供者:杉本太平)

○教育相談・保育相談からみる共に生きる関係のあり方(子どもの次元、大人の次元、臨床的かかわり

○家族の関係の在り方・5つのかかわり原理(マラーの分離個体化との関連)

②話題提供に基づく心理劇的場面の構成 (監督:杉本太平)

●展開1 保育士が話しているときに子どもが私語をしている

・保育士は「話が聞けないのなら年少さんのクラスへ行きなさい」と言って、他の子を連れて出て行く。残された子と他の保育士とのかかわりを表演する。

●展開2 保育士のかかわり方のパターンを変える

・私語している子に話の内容を聞いてみる。

●心理劇から明らかになった課題の整理(参加者の感想と監督のコメントから)

子どもの行動を問題行動と捉えると、それを解消しようとする大人の価値観が対応に反映する。反対に、子ども行動を「サイン」と捉えると、その行動の背景にある子どもの想いをまず理解しようとする態度に変わる。大人の感情が「しかる」ではなく「おこる」レベルに至ると子どもには「怒られた」というかかわり感情しか伝わらず、自分自身の行動への内省(何が課題であったかという理解)は得られない。大人の側に正しさ(価値)が成立しているときには、子どもへの関与が「冷たい」(傷つける)対応になることもある。結果として、子どもに納得いくようにかかわることができれば子どもの心に傷は残らない。

●展開3 子どもにかかわる他の保育士と保育士同士の連携を考える

・年少クラスに子どもを連れて行きながら、他の保育士が泣いている子どもの話を聴く。

●心理劇から明らかになった課題の整理(参加者の感想と監督のコメントから)

叱る人役割と支える人役割を保育士同士で分担できれば(役割連携)良い。子どもがどれくらい傷ついているのか、子どもなりの気持ちを聞いて把握し支える役割の大切さとそのことを保育士同士でも共有できることがより良い保育に繋がる。叱る先生は、何故そうするのか、その子の育ちにどのように役に立つのかを考え、それを他の保育士と共有することも重要である。保育者同士が子どもや保護者の問題を自分で抱え込むのではなく、協働して組織として連携することを意識することが、より良い家族支援に繋がる。

●まとめ(時間の関係でシェアリングはなく、監督総括)

今回は、年間テーマである「家族を支える人間関係の構築」ー地域・教育・保育・福祉・医療などの諸領域からーに関連して、「保育・教育現場における人間関係」について、HRST による研修を行った。特に、事例と心理劇を中心に支援対象者(子どもと保護者)への理解を深めることが、実のある支援に繋がることを確認できた。また、「人間関係士」としても個への関与以外にも組織としての連携・協働の重要性とどのような人間関係を構築すべきか、というヒントが多く得られた研修内容となった。

(4)キーワード

- ・教育相談・保育相談:対象者理解と臨床的かかわり
- ・子どもの行動を「問題行動」ではなく「サイン」と捉える
- ・「冷たい」かかわりと「あたたかい」かかわり
- ・協働的な組織としての連携

4. 第 27 回研修会 (12 月 10 日/越谷市サンシティホール小会議室/杉本龍子:資格講座 B-2)

(1)テーマ「社会福祉領域におけるさまざまな問題と家族への支援」

(2)展開技法 講義・行為法(心理劇)「高齢者の日常生活適応への支援」・シェアリング

(3)研修内容

少子高齢社会には様々な問題(晩婚化、高齢出産、不妊、体外受精、「家族」の変化(核家族・単身・高齢者世帯の増加)が山積している。そのようななかで国の施策は住み慣れた生活の場において必要な医療・介護サービスを受けられることをめざしている。安心して自分らしい生活を実現できる社会を構築するための在宅医療の充実にむけて、身近なこととして家族への支援を如何にするか考えたい。

〈問題の背景〉

少子高齢社会 急速な超高齢社会 人口減少 婚姻数の低下 晩婚化 高齢出産 不妊 体外受精 多胎妊娠 低出生体重児 「家族」の変化(核家族・単身・高齢者世帯の増加)

①テーマに基づく話題提供 (話題提供者:杉本龍子)

○最近の動向(診療報酬改訂・貯金と保険の限度額引き上げ・電力小売りの全面自由化

○「呼び寄せ」高齢者の問題

○出生の過程に関する考え方

○国の施策〈社会保障・税一体化改革における医療の方向性〉

○私たちが行える支援＝包括支援システム

②話題提供に基づく心理劇的場面の構成 (監督:杉本太平・杉本龍子)

●A<呼び寄せ高齢者の実際例> 日常生活適応への支援:「困難を抱えている人を見た時に、その人をどのくらい理解できるか」「出会い方と課題をどう整理するか」「背景・課題を知る」
主人公:地方から来たおばあさん(一人マンション暮らし(電車に乗れない・買い物先が分からない・マンション自体の設備の使用法もわからない)に隣人:支援者として関わる
4グループ(2人でチームになり支援者になる) →作戦タイム(支援課題の整理)
補助自我Bモノローグ 表演後の課題の整理
演じてみての感想

●展開1(出会い方・信頼関係の形成)

支援者①: ゴミ出しの説明を兼ねて訪問する。手伝いを申し出る。

主人公:心配してくれて嬉しい。気にかけてくれる人がいるのは有り難い。何をするのも心配。

●展開2(日常生活活動への支援課題の明確化)

支援者②: 燃えないゴミの日を兼ねて訪問。病院の資料渡す。買い物や家のことで困っていないか。個人生活・隣人生活・行政への頼み事はないか。

主人公:血圧が高いので、病院情報を知りたい。4月に息子転勤で一人暮らしになって困っていた。自分のことを語りだす。

●展開3(具体的な支援活動の展開)

支援者③: 具体的に病院に誘う。公民館の紹介、趣味を聞く。窓口に行く。押し付けにならないように 気を付けた。

主人公:血圧の薬が切れる頃で有り難い。色々心配してくれて心強い。趣味のことなど、会話が楽しめた。功を奏した。

●展開4(日常生活から地域に繋げる支援活動)

支援者④:みかんをおすそ分け。お花を見ながら散歩に誘う。自然に町になじむように心がける。よもやま話をしつつ、関係性をつくり、人となりを知る。背景を知ること、情報を引き出しつつ、情報ニーズを知る。

主人公:支援者の関わりで心が安らぎ、岡山と違う景色を語り、困りごとを述べる。

③シェアリング・まとめ

- ・都会だと、変に声を掛けにくい、人を選ばないといけない場合もある。地域によっても違う。
- ・人間関係の奥深さを感じた。データをふまえた話題提供と心理劇の構成に鮮烈な印象。
- ・声をかけられたくない人も多い。民生委員でも難しい場合もある。

- ・心理劇で皆がふるまう姿に驚いた。ふるまうには、性格が影響する気がする。主人公と上手く関わる携帯活用の工夫もある→実際の事例では2回目の訪問で携帯の番号を交換
- ・色々な角度から人が関わると人は生き生きしていくことが分かった。物(みかん・洋服)を媒介として褒められる導入が嬉しい。身近な物で共通項が作られると関わりが喜びになる。
- ・情報だけをもらうより、一緒に行動してくれる方が、スムーズで主人公の表情も明るくなった気がした。今度、自分もマンションで実際にやってみたい。
- まとめ:知らんぷりする人もいるが、自分は自分から挨拶している。そうすることで、人間関係が円滑になった。(東日本大震災時の2例を紹介)。お節介と命を守ることの大切さ。用心のみでは寂しい。察知する大切さ。聞き方の大切さ:上手に相手の生活歴を聞き、何を求めているかを豊かに想像できる力は学ぶところ。

(4)キーワード

- ・診療報酬改訂、社会保障・税一体化改革、包括支援システム
- ・「呼び寄せ」高齢者、家族の変化
- ・日常生活活動を向上させるための支援課題
- ・出会い方・信頼関係の形成
- ・日常生活から地域に繋げる支援活動
- ・察知する大切さ。聞き方の大切さ

5. 第28回研修会 (1月21日/越谷市中央市民会館/岡田昌子:資格講座B-1)

- (1)テーマ「家族や身近な生活場面からNGワード・ラッキーワードを考える」
- (2)展開技法 講義・行為法(心理劇)「NGワード・ラッキーワード」・シェアリング
- (3)研修内容

人間関係が崩壊した殺伐たる事件が、世界的に、日常的に、報道されているような錯覚さえ持ち兼ねない昨今に、個人から集団へと留まることのないいじめ・パワーハラスメント・詐欺・犯罪・性犯罪・紛争等、枚挙に遑がない。そのような現状を、一人一人がどのように行動し、支援していればストップすることができるのか。家族から、地域から、少しでもより良い人間関係が創造できるように、身近で困難な問題を話し合いながら手立てを考える。

〈キーワード〉 ネットの普及・赤信号皆で渡れば怖くない・教育・無職・非正規雇用・非婚
・NGワード・LUCKYワード

①テーマに基づく話題提供 (話題提供者:岡田昌子)

- ネットの普及等で人を信じるのが難しい時代
- 相手の違いや立場を思いやり理解する思考力がスルーされ、カットされやすい人間関係
- 言葉に潜在する問題「プラスメッセージの利害」と「マイナスメッセージの利害」
- 個人の言動表現の発達過程と形成:IDを獲得と自分らしさ⇒コミュニケーション能力
- 自分を知るには?・相手を知るには?「NGワード」と「LUCKYワード」

②話題提供に基づく心理劇的場面の構成 (監督:杉本太平・岡田昌子)

- 自分を知る:自分のNGワードとLUCKYワードを伝え合う2)
→互いに感想を伝え合う→相手を知る

●展開1

卒業を控えた大学生に対して、教師がどのように言葉をかけていくかを考える。

●展開2

嫁と姑の関係で、嫁はすぐ抱っこをしたがる。姑は抱き癖がつくのであまり抱かない方がいいという。

③シェアリング・まとめ

- ・ある程度の関係ができているところでの心理劇をやったが、それを外の関係に活かしていく

ことを考えていきたい。

- ・その人の価値観によって、言葉のもつ意味は変わってくるのだな。その状況に即した言葉が言えるように。関係を変えると感じ方が変わるということが心理劇をみていてわかった。
- ・関係性がわからないと、相談されてもアドバイスをしにくい。
- ・自分の息子を嫁に取られちゃった、とか、二世帯住宅で台所を分けたいと嫁が言うなどの関係があると、言葉を肯定的に受けとめることができないのではないかな。
- ・自分が資格を取りたいという学生はやりやすいが、親に言われて来たという学生は難しい。
- ・自分は明るいのだが、人の名前を覚えられないのだが、名前で言われてとても嬉しかった。
←名前で呼ぶことはLUCKYワードなのだろう。
- ・NGワードやLUCKYワードは、何を許しあっているかを見極めることが大切ではないか。また、その間で何をつくりだそうとしているかを見極めていくことが必要だろう。
- ・説明していくことは、関係が築くということにとって重要なことであると思う。

(4) キーワード

- ・NGワードとLUCKYワード
- ・ネットの普及と対面的コミュニケーションスキルの低下
- ・「プラスメッセージの利害」と「マイナスメッセージの利害」
- ・個人の言動表現の発達過程と形成:IDを獲得と自分らしさ⇒コミュニケーション能力
- ・言葉に反映される価値観と肯定的に受けとめ
- ・言葉を伝え合える関係性の形成

6. 分析・考察

本報告では、キーワード分析から「家族を支える人間関係の構築—地域・教育・保育・福祉・医療などの諸領域から—」とした今年度の研修実践における学びを考察する。

(1) 家族を取り巻く諸題についての学習成果

「家族を支える人間関係の構築—地域・教育・保育・福祉・医療などの諸領域から—」とした研修から「高齢者を抱える家族」、「医療的支援を必要とする人を抱える家族」「幼児・児童・生徒に関わる家族」、「地域社会における対人関係と家族」などに焦点を当てた家族支援を考える研修内容となった。

高齢者や医療問題では、特別養護老人ホーム、居宅介護、これからの老人問題、高齢者の生きがいややる気、介護する家族の生活を支える体制、診療報酬改訂、社会保障・税一体改革、包括支援システム、「呼び寄せ」高齢者などについて、話題提供(講義)を通して学ぶことができた。

また、幼児・児童・生徒に関わる家族の問題では、保育・教育の現場における問題や課題について、子ども達の「心を支える」ための教育の在り方、教師理解・教師を支えるための支援、組織的な支援体制の構築、多面的・多層的な理解のためのアセスメントと個別的な教育・指導計画、家庭状況・家族関係への情報収集、事後対応(家庭や専門機関との連携)、キーマンの見極めと協働関係などの現場の実践に即した学びや、出会い方や信頼関係の形成、察知する大切さや聞き方の大切さ、言葉に反映される価値観と肯定的に受けとめなどの基本的な態度や取り組みについても学べた。

結果として、現代社会に内包される様々な問題や課題を社会的問題のみならず実践的側面で深く掘り下げる学習成果が認められた。

(2) 家族を支える人間関係と「人間関係士」としての支援

今年度の研修では、特に「人間関係士」としての支援課題について、「制度と地域格差を是

正する支援者スキル」「対象者理解とアセスメント」「家族と関わる組織の協働関係の構築」「家族内の要支援者とそれを支える家族の相互理解と関係性の向上」「支援者を支えるための支援」「日常生活活動を向上させるための支援課題」「具体的な支援と実践技法」「基本的な態度形成と言葉の重要性」などについて、体験的に理解を深められた。

今年度は、本地区会の特色である「ヒューマンレリション・スキルトレーニング(Human Relation Skills Training)=HRST」による成果として、行為(心理劇)による、行為・情緒・認識・洞察の学習の全ての側面で、理論・技法(技術)・実践が統合された形で、「専門性」の向上が認められる学習効果が得られたと考えられる。